放眼日中

持続可能な企業経営求める中国人

コラムニスト・アジアンウオッチャー
須賀　努

すが・つとむ　東京外語大中国語科卒。金融機関で上海留学、台湾2年、香港通算9年、北京同5年の駐在を経験。現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。

福建省福州市で中国茶の取材をした。福州は1840～42年のアヘン戦争後、一時、上海と並ぶお茶の輸出基地だったが、1895年に日本が台湾を領有した後は、1898年に日清間で結ばれた不割譲条約により他国への租借が認められなかったためか、またインド紅茶に押された影響か、上海や香港のように経済発展することはなかった。

福建省武夷山は、現在では「大紅袍」など岩茶と呼ばれるウーロン茶で有名だが、歴史的には正山小種（ラプサンスーチョン）という紅茶が名を馳（は）せている。英国人が最も好んだ紅茶であり、400年の歴史を誇っている。また、福州付近で取れるジャスミン茶も150年の歴史があり、白茶は宋の時代に皇帝に献上されたというから、もっと古い歴史がある。

だが、お茶の歴史を聞いて回ると、皆歴史の古さは強調するが、必ず「社会主義中国の建国後、お茶の工場は一つになり、輸出入の窓口も一本化された」との話に行き当たり、以前の手法は途中で途絶えていた。社会主義下の中国では国営化が進み、個々の企業が勝手に生産することを阻んだ。その状態から脱却したのは改革・開放後の1980年代以降になる。お茶の歴史は古いが、企業の歴史は長くても30年に満たない。

最近、日本を訪れる中国人の民間企業経営者が増えている。以前は欧米、特に米国式経営を目指す経営者が多かったが、少し変化が出てきた。まず、観光でいえば富士山、ディズニーランドという感じで、トヨタ自動車やパナソニックなど、日本を代表する企業への訪問を希望する人が多かった。

しかし、ここに来て、特に2回目以降の訪日時に彼らが希望する訪問先は「100年以上続いている企業」になっている。第2次世界大戦後の高度成長期を支えた企業や、最近急激に伸びてきた企業への興味が薄れたのは、自らも高成長を遂げ、同じことを体験してきているということが背景にあるのだろうか。

同時に、「利益だけでは企業は続かず、成長はいつか止まる」という恐怖や焦りが切実感を増幅させているのだろうか。長期かつ安定的に企業を持続させる方法、それには日本的なやり方がマッチしているのではないか、という考え方がある。

「あまりにも忙しく、このままでは身が持たない」とこぼす経営者を何人も見てきた。現在、中国で起きている激烈な競争を勝ち抜きながら、長期安定を目指す経営者の葛藤やプレッシャーは想像以上だ。

彼らに極上の福建茶を味わう余裕を与えることはできるのだろうか。もしその方法を教えてあげられる日本企業をご存じの方がいたら、筆者にぜひともご一報いただきたい。「成長から安定へ」という中国政府のスローガンにも合致しており、日中の相互理解に大いに役立つことは間違いないからだ。